

ムードとモーダルのカートグラフィー*

遠藤喜雄

神田外語大学

本稿では、副詞節に生じるムード表現の性質を探索する。まず、英語の条件節に焦点を当て、そこにムードを表す副詞が生じないことをみる。そして、この事実が、Rizzi (2004)の素性によって定義される相対最小性から導かれることを示す。次に、この考えを関係詞節に拡張する。さらに、日本語の条件節に焦点を当て、そこにはある種のムード要素が生じることを見る。最後に、この事実が、井上(2006, 2007)およびKrapova and Cinque (2005)の論じる真性モーダルと疑似モーダルの特性を考慮することにより、英語と同様に、素性によって定義される相対最小性から導かれることを示す。

0. はじめに

本稿では、条件文に生じるムードやモーダル表現を取り上げ、Rizzi (2004)で提案された(1a)に見る談話領域のカートグラフィーが、井上(2008)で提案されたモーダル句を含む(1b)に改訂される可能性を探索する。

* 本稿は、2009年に行われた井上ゼミ、筑波大学での招待講演、東北大学大学院（文学研究科）および首都大学東京／都立大学での集中講義において口頭発表したものの一部に加筆修正を加えた改訂版である。これらの催しに参加してコメントを下された方々、とりわけ以下の方々からは、貴重なコメントを頂いた。これらの方々に、心より感謝申し上げます。（敬称略）：井上和子、長谷川信子、島越郎、北田伸一、本多正敏、廣瀬幸生、島田雅晴。尚、本研究は、日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究（B）『談話のカートグラフィー研究：主文現象と複文現象の統合を目指して』（研究代表者：遠藤喜雄）、日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究（B）『文の語用的機能と統語論：日本語の主文現象からの提言』（研究代表者：長谷川 信子）、日本学術振興会科学研究費補助金（基盤研究（B）『談話のタイプと文法の関係に関する日英語対照言語学的研究』（研究代表者：廣瀬幸生）の補助を得てなされている。最後に、本稿における不備は全て筆者に帰するものである。

- (1) a. [CP Force Topic Focus Fin [IP Person/Num ...
Tense [vP VP
b. [CP Force ModalP Topic Focus Fin [IP
Person/Num ... Tense [vP VP

まず、用語を整理しよう。「ムード」と「モーダル」という表現は、次の特徴を持つ。

- (2) ムード : 話し手が命題に対して持つ心的態度を表す表現。(Lyons (1977; 452))

モーダル : そのような表現のうち、主に動詞につく形態素(morpheme)。 (Palmer (1986; 21))

カートグラフィーでは、ムード要素は、主にムードに関わる機能範疇の指定部で認可され、一方、モーダル要素は、主にムードに関わる機能範疇の主要部で認可され、様々なムードに関わる意味を付与されるとする。本稿では、ムードの副詞やモーダル表現である助動詞の分布に焦点を当て、それらが副詞節内に選択的に生じる事実を見る。そして、副詞節内におけるムードやモーダル要素の分布が、素性に基づく相対最小性(related minimality (Rizzi 2004))から導き出されることを見る。

本稿は、以下のように構成されている。まず、第1節において、英語の副詞節に生じるモーダルやムード表現の分布を考察する。第2節では、その分布を、井上(2008)の考えを用い、相対最小性(relativized minimality)で説明する。第3節においては、その考えを、関係詞節の構造に拡張する。第4節においては、その考えを、日本語の条件文に拡張する。最後に、第5節において、今後の課題を述べる。

1. 副詞節におけるムードとモーダル

まず、副詞節の従来の分析を見よう。生成文法における副詞節の最も詳細で初期の研究として、Geis (1970)がある。Geis は、時の副詞節に見られる次の文の多義性に着目する。ここでは、when で示される時間が主張する (claim) 時間 (= 高い解釈) か、出かける (leave) 時間 (= 低い解釈) かで、多義性が生じることが表されている。

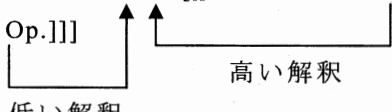
(3) I saw Mary in New York when [_{IP} she claimed [_{CP} that [_{IP} she would leave.]]]

(i) 高い解釈 : at the time that she made that claim

(ii) 低い解釈 : at the time of her presumed departure

Larson (1990)は、この多義性に着目し、when 節において、時のゼロ演算子が when の局所的な領域に移動するとする。例えば、上の文では、leave または claimed の節からゼロ演算子が when の位置まで移動する可能性が2つあるため、上で述べた2つの時に関わる解釈に多義性が生じるとした。

(3') I saw Mary in New York when [_{IP} she claimed Op [_{CP} that [_{IP} she would leave Op.]]]




低い解釈


高い解釈

Haegeman (2008)は、時のスコープに見るゼロ演算子の分析を、条件文に応用した。つまり、条件文においても、ゼロ演算子が次に見るように移動するとした。¹

¹ 正確には、Bhatt and Pancheva (2002, 2006)に従い、world operator が移動するとしている。ここでの world operator とは、非現実を表す irrealis operator である。

- (4) a If John arrives late
 b [_{CP} OP_w C° [John arrives late in w]]
- 

ここでのゼロ演算子は、可能世界に関わる演算子である。この可能世界の演算子は、非現実(irrealis)を表す。これを根拠に、Haegeman は、ムードタイプのゼロ演算子が、次に見る Cinque (1999)の提案する Mood 階層のうち、Mood(irrealis)から移動(Cinque 1999) するとした。

- (5) MoodP_{speech act} > MoodP_{evaluative} > MoodP_{evidential} > ModP_{epistemic} > TP > MoodP_{irrealis}
- 

Haegeman は、この可能世界を表すゼロ演算子が移動する際に、同じタイプのムードタイプの演算子が生じると、阻止効果(blocking effects)が生じるとした。より具体的には、Rizzi (1990)が提案する相対最小性(relativized minimality)により、ムードタイプの演算子が、同じタイプのムード表現を飛び越すと、非文法性が生じる。そのため、ムード表現が条件節には生じないとした。(ここでは、ムードの副詞は、指定部の位置を占めるが、may / might といったムード表現の主要部には、その指定部にゼロ演算子が生じる仮定がなされている。)

- (6) a ??*If frankly he's unable to cope, we'll have to replace him.
 (Speech act)
 b *If they luckily /fortunately arrived on time, we will be saved.
 (Evaluative) (Ernst 2007: 1027, Nilsen 2004).
 c. *If the students apparently can't follow the discussion
 (Evidential)
 in the third chapter, we'll do the second chapter.

d. *John will do it if he may/must have time.

(Epistemic)²

(Declerck & Depraetere (1995: 278), Heinämäkki (1978:22), Palmer (1990:121, 182))

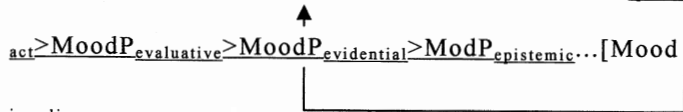
ここでの問題は、Haegeman が、ゼロ演算子の移動先を明示していない点にある。RM は、連鎖の中に同じタイプの要素が介在することを禁ずる経済性の原則である。そのため、Haegeman は、その移動先がムード要素であり、そのムード連鎖にムード要素が介在すると、RM 違反が生じるという説明が成されることになる。(ちなみに、RM には、もう一つ Starke(1990)のバージョンがあり、この RM では、連鎖に関わる定義は必要とされない。) さて、この Haegeman の問題を解決するために、本稿では、次の提案を行う。

提案 1 : 井上(2008)や Krapova and Cinque (2005)に従い、CP の談話領域に Modal Phrase がある。条件文では、IP 内の Mood(irrealis)から CP 内の ModalP をターゲットにしてゼロ演算子が移動する。

この点を詳しく見ると、文は、(7a)の構造を持ち、条件節では、(7b)に見るように、非現実(irrealis)のムードの位置から、CP 領域 ModalP に移動が生じる。この移動で形成されるのは、ターゲットがムードの要素なので、ムード連鎖となる。そのムード連鎖の間に、同じタイプのムード要素が生じると、RM 違反が生じる。(この ModalP の CP 内における相対的な位置を特定する作業には、さらに研究が必要である。)

² Haegeman は、別の可能性として、文頭に、断定を表す assertion operator が生じる可能性を示唆している。この演算子は、高い副詞を認可する役割を演じていることも示唆している。

(7) a. [CP Force ModalP Topic Focus Fin [IP
Person/Num ... Tense [vP

b. [CP Force ModalP ... MoodP_{speech}


ムード連鎖 (mood chain)

ここで、RM は次のように定義される。

RM: 次の(8)において X と Y の間に同じタイプの要素 Z が介在すると X と Y の間に局所的な関係は確立されない。

(但し、Z は Y を c 統御するが、Y は Z を C 統御しない)

(8) ...X...Z...Y...³

しかし、ここで問題が生じる。Rizzi (2004)は、RM の介在要素の分類をする際、次のクラス分けを提案している。しかし、この分類には、ムード要素が含まれていない。最小の演算装置を想定する精神にしたがえば、ムード要素を下のクラスのどこかに、同化させることが望まれる。

(9) a. 項クラス(argumental class):

人称、数、性、格 = 項の名詞句

b. 量化クラス(quantificational class):

wh、否定、フォーカス = いわゆる取り立て要素

c. 修飾クラス(modifier class):

認識、評価、否定、様態の副詞

d. 主題クラス(topic class) = 主題要素

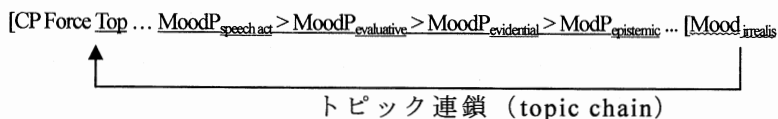
³ 時に誤解されることがあるが、Cinque (1999)は、時制(T)より上の階層に生じているムード要素が CP 領域にあるのではなく、IP 領域にあると考える。つまり、MoodP_{speech act} > MoodP_{evaluative} > MoodP_{evidential} > ModP_{epistemic} は、IP の領域に属する副詞の機能範疇である。

この問題を解決するために、本稿では、次の提案をする。

提案 2 : ムード連鎖やムード要素は、トピックのクラスに属する

この提案の趣旨は、ムード要素を主題(topic)クラスに分類している点にある。Rizzi (1997)によれば、CP の談話領域には、複数のトピックのための位置があり、その一つが、非現実を表すゼロ演算子の着地点となる。この連鎖は、TopP をターゲットにするため、トピックタイプの連鎖を形成する。しかし、その間に、トピックタイプのムード要素が介在すると、RM により、非合法的な標示が生じることとなる。

提案 3 :



ここでの説明は、ムードとトピックが同じ類をなすことに大きく依存している。そこで、この2つが同じ類をなす証拠を、以下で提示する。

証拠 1 : 阻止効果を持つ構造的に高いムードの副詞は「ば」や「は」というトピックの「は／ば」でマークされることが可能。ちなみに、「は」と「ば」は歴史的に結びついている。また、「は」のより古い形は「ば」であった (野田尚史 (私信))。

Cinque (1999)では、様々なタイプのムード副詞が階層構造をなして IP 領域の機能範疇で認可されることが示されている。そして、これらのムード表現には、すべて「は」や「ば」を任意的につけることが可能であり、このことは、トピックとムードの並行性を示している。

- (10) a. 正直に言えば、(Speech act)
- b. 幸運なことには、(Evaluative)
- c. 申し立てによれば (Evidential)
- d. おそらくは (Epistemic)

証拠 2 : 条件節では、主題化された項もムード表現と同じ阻止効果を持つ。

Rizzi (2004)においては、主題タイプの要素が、別の主題タイプの要素を飛び越すことが RM により阻止されることが示されている。(イタリア語では独立した理由で阻止されることはない。) Haegeman は、以下に見るように、副詞節において、トピック要素が生じることが不可能であるとしている。これは、トピックタイプの連鎖に同じトピックタイプの要素が介在するため、RM 違反が生じるためである。

- (11) *If these exams you don't pass, you won't get the degree.

Cf. If on Monday the share price is still at the current level
then clearly their defence doesn't hold much water.

(Observer, 11.7.4, business, p. 22 col 5)

3. 関係詞節の構造への拡張


本節では、上で見た考えを関係詞節に拡張することを試みる。Kajita (1976)は、補文に生じる様々なタイプの副詞要素が生じる可能性を検討している。そこでは、speech-act 副詞が、非制限的關係詞節には生じるが、制限的關係詞節には生じない、という点が観察されている。

- (12) a. John, who, frankly, was incompetent, was fired.
- b. *The only paper [that, frankly, I didn't understand] was yours.

しかし、Chiba (2003)が指摘するように、この観察には注意が必要である。なぜなら、Fairclough (1973 : 523)が観察するように、先行詞が a に導かれる非定表現の場合、frankly が制限的な関係詞節内に生じることが可能であることからである。(但し、Haegeman (2010)では冠詞 a がついても関係詞節が主語位置に生じると、非文法性が生じる事例を挙げている。)

- (13) a. John has bought a painting that frankly I find rather ugly.
b. *John has bought the painting that frankly I find rather ugly.

Chiba (2003 : 105)は、この事実を、制限的な関係詞節が、新情報を提示する機能を持つことに起因するという示唆をしている。しかし、原理だった説明は、与えられていない。そこで、本稿では、この Chiba の知見を活かし、この(13)に見る対比に対して、原理的な説明を与えるを試みる。まず、関係詞節の分析に関して、Rizzi (2009)の分析を仮定する。Rizzi によれば、関係節に関わる機能範疇 RelativeP(以下、RelP)が CP 領域にある。さらに、Rizzi (2009)では、CP 領域の機能範疇は、その指定部と補部に、音と意味に関する指令(instruction)を与える。この分析は、次の図で表現できる。

- (14) [RelP the/a painting that frankly I find <the/a painting> rather ugly.
- 

Rizzi によれば、機能範疇の中には、[+/-specific]という特定性を示す素性がある。しかし、この特定性が RM に関わる事例は提示されていない。通例、関係節は、弱交差現象(weak-crossover)を示すため、量化(quantificational)のタイプとされている。しかし、関係節には、先行名詞が、a を含む非

定のタイプと、the を含む定のタイプの 2 種類がある。そこで、本稿では、次の提案を行う。

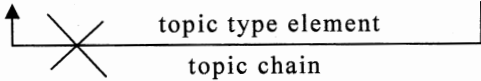
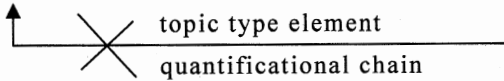
提案 4 : RelP の主要部は[+/-specific]の素性を追加することが可能。

これは、次の点を示している。RelP は、量化(quantificational)タイプの連鎖を形成するのであるが、異なるタイプの素性が追加されると、その追加された素性のタイプに属する連鎖が形成される。例えば、Rizzi (2009)は、who などの量化要素が、通例は、量化のタイプに属するが、which person になると、topic という素性が追加されるため、トピックタイプの連鎖が形成されるとしている。これと同様に、RelP 自体は、量化タイプであるのだが、the book のような定の要素が追加されると、RelP は topic/specific な要素を牽引し、トピックタイプの連鎖が形成される。そのため、先行詞が the を伴う場合は、トピックタイプの連鎖が形成され、frankly 等の発話行為(speech-act)も、それよりも低い fortunately, allegedly, probably 等の副詞も、トピックタイプなので、RM により非合法的な表示が生じる。そして、その表示は、完全解釈(FI)の原理により排除される。

一方、非定の a が先行詞に生じる場合は、[-specific]の素性が追加されると考える。しかし、[-specific]という追加素性は、新しい情報を表すという意味でフォーカスと同じ量化タイプに属し、量化タイプの連鎖が形成される。そのため、量化タイプの連鎖に生じる、fortunately, allegedly, probably などのトピックタイプの副詞は、異なる素性タイプなので、RM によって、介在要素とはならない。そのため、合法的な表示が形成され、完全解釈の原則により排除されることはない。

では、a が先行詞に生じる場合は、なぜ、最も高い発話行為の副詞 frankly が生じることが不可能となるのであろう

か？これは、遠藤(2009)で示されたように、発話行為の副詞が Force という話し手と聞き手の両方が関わる文タイプ（または、Shlonsky (2009)のいう、Speech-act Participant Phrase: SapP）により認可されるので、関係詞は、Haegeman (2006/9) に見るように、Force が活性化されていない。そのため発話行為の副詞が制限的な関係詞節に生じることはない。（同じ説明は、定表現 the を持つ名詞句が先行詞になる場合にも、当てはまるかもしれない。）以上を図示すると次のようになる。

- (15) a. no Force...RelP...frankly, fortunately, allegedly, probably...the book...
- 
- b. no Force...RelP...*frankly, fortunately, allegedly, probably...a book...
- 

次に、非制限的な関係節を見よう。非制限的な関係節には、frankly, fortunately, allegedly, probably の全てのタイプの副詞が生じることが可能である。まず、非制限的な関係節の特徴を見よう。非制限的な関係節は、定の先行詞に見る指示対象(referent)を限定する機能を持たない。つまり、RelP は、[+specific]という素性を持たない。そこで、次の提案を行う。

提案5：非制限的な RelP は、[-specific]の素性を持ち、量化タイプの連鎖を形成する。

非制限的な関係節において形成される連鎖は、量化タイプの連鎖で、間に生じるトピックタイプの副詞要素は、介在要素とはならず、合法的な表示が得られる。その結果、完全解釈の原理により、非制限的な関係節においては、全てのタイプの副詞が生じる表示が合法的となる。（ちなみに、非制限的な関係節は、話し手と聞き手が関わる Force をもつため、発話

行為の副詞も認可できる。)

ただし、非制限的な関係節は、a という非定の関係節と異なる点もある。それは、非制限的な関係節が、話し手と聞き手の関わる点にある。この話し手と聞き手の情報を統語構造に組み込むには、2つの方法がある。1つは Force を話し手と聞き手の関与する要素の認可詞と考える方法で、もう1つは Shlonsky (2009)に見るように、CP に発話行為の機能範疇 Speech-act Participant Phrase (SapP)を設ける方式である。この SapP を、非制限的な関係節の先行名詞の移動先と考えることもできる。この考えは次のように述べることができる。

提案5'：非制限的な RelP は、SapP をターゲットにし、量化タイプの連鎖を形成する。

提案5と同じく、非制限的な関係節において形成される連鎖は、量化タイプの連鎖で、この連鎖に生じるトピックタイプの副詞要素は、連鎖において介在要素とはならず、合法的な表示が得られる。この代案のメリットは、次の点にある。Rizzi (2009)によれば、談話に関わる CP 領域は、意味と音声の部門に対して指令を出す。非制限的な関係節が、話し手と聞き手の関わる情報を表す。これは、SapP の主要部 Sap は、指定部に生じる先行詞に対して、その右端(right edge)に挿入のイントネーションを与え、その補部に生じる関係詞節に対して、その右端（関係節の最後の部分）に挿入のイントネーションを与えよ、という指令を出すと考えることができる。

4. 日本語の条件文

本節では、英語の条件文の分析が日本語の条件文にも当てはまることを見る。まず、副詞節である条件文に生じる要素を見よう。南(1974)は、副詞節にどのような要素が生じることが可能かという主文への従属度の基準で、副詞節を次に見る

4 種類に分類している。

(16) A 類：様態、頻度の副詞＋補語＋述語 (南 1974)

B 類：A 類＋制限的修飾句＋主格＋（否定）＋時制

C 類：A 類＋B 類＋非制限的修飾句＋主題＋モーダル

D 類：A 類＋B 類＋C 類＋呼び掛け＋終助詞

南によれば、条件節は、B 類に属する。つまり、例えば、以下に見るように、「なら」条件節には、B 類に可能な主格要素「が」は生じることが可能だが、主題要素「は」が生じることが不可能である。また、C 類には生じることが可能なムード要素「たぶん」や「なら」は生じることが不可能である。「なら」条件文に関しては、井上(2006)や眞鍋(2008)を参照。

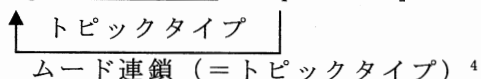
- (17) a. 山田さん{?? は／が}来たなら、パーティーを始めましょう。
- b. 雨{?? は／が}降ったなら、試合は中止になるでしょう。
- c. *彼は多分来るだろうなら、彼女は帰ってしまうでしょう。

本稿の提案は、日本語の条件節においても、ゼロ演算子が移動し、ムードタイプの連鎖を形成するという点にある。ここでムードタイプの連鎖は、前節で見たように、主題タイプ(topic type)である。

提案 6：日本語の条件文でも、ムードタイプのゼロ演算子が移動する。

この提案は、次のように表示される。

(18) [ModalP Op...は／たぶん...<Op>...なら]



さて、日本語の条件文は、井上(2007)が詳細に論じるように2つのタイプがある。ひとつは、真性モーダル、もう一つは、疑似モーダルである。これら2つのモーダルは、次の特徴を持つ。

(19) a. 真性モーダル：

過去形を持たない；1文中に一つしか生じない；動詞の活用語尾（例：「だろう」）

b. 疑似モーダル：

過去形を持つ；多重の疑似モーダルが1文中に可能；動詞（例：「よう」／「はず」）

ここで注意すべきは、真性モーダルが上で見たB類の「なら」条件文に生じることが不可能であるが、疑似モーダルは、「なら」条件文に生じることが可能であるという点である。

(20) a. *雨が降るだろうなら、明日の試合は中止になるでしょう。（真性モーダル）

b. 雨が降るようなら、明日の試合は中止になるでしょう。（疑似モーダル）

本稿では、この事実を次のように説明することを試みる。

⁴ 日本語の「は」でマークされた要素は、対比のフォーカスの解釈を許し、その解釈では、「は」でマークされた要素は条件文に生じることが可能である。

(i) 太郎は来れないが花子は来れるというのなら、パーティーは予定通りにやりましょう。

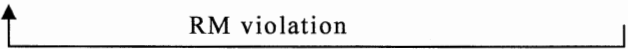
RMのクラス分けによると、フォーカス要素は、トピックとは異なる量化(quantification)のクラスに属する。そのため、RM違反は生じない。

提案 7: 「なら」条件文に真性モーダルは生じることは不可能だが、疑似モーダルなら生じることが可能であるという事実は、RM と Cinque 階層と井上(2007)の条件文の分析から導かれる。

まず、真性モーダル「だろう」は、Haegeman の英語の分析と同様に、認識(epistemic)のムードの機能範疇の位置を占めると考える。

(21) Force ModalP ... MoodP_{speech act} > MoodP_{evaluative} >
MoodP_{evidential} > ModP_{epistemic} ... [Mood_{irrealis}
「だろう」

さらに、Haegeman にしたがって、条件文においては、ゼロ演算子が、非現実(irrealis)のムードの機能範疇から移動すると考える。井上(2008)や Krapova and Cinque (2005)は、CP 領域にムードの機能範疇があることを示している。本稿では、この考えを採用し、非現実を表すムードの機能範疇の着地点は、CP 領域にある、ムードの機能範疇と考える。すると、「なら」条件文においては、次に見るように、ゼロ演算子が、非現実の機能範疇に生成され、CP 領域にあるモーダルの機能範疇をターゲットに移動が生じ、トピックタイプのムード連鎖を形成する。

(22) ModalP ... MoodP(epistemic) 「だろう」 [Mood_{irrealis}


ここでは、トピックタイプのムード連鎖が形成され、その連鎖の間に同じタイプのムード表現が介在するので、RM により、この連鎖は非合法的となる。

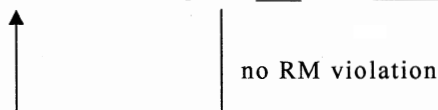
一方、疑似モーダル「はず」や「よう」に関しては、井上(2008)に従い、動詞と考える。そして、この疑似モーダルは

動詞なので、CP より下の VP に生成されると考える。

(23) [CP Force ModalP ...MoodP.. [Mood_{irrealis} VP「よう」／「はず」]

この場合、下に見るように、非現実(irrealis)のムード機能範疇から CP 内のモーダルの位置にゼロ演算子が移動して、トピックタイプの連鎖を形成する。しかし、疑似モーダルは、その連鎖よりも低い動詞句内に生成されるため、連鎖にとっての介在要素とはならない。この連鎖が合法的であるため、疑似モーダルは、「なら」条件文に生じるのである。

(24) [CP Force ModalP ...MoodP.. [Mood_{irrealis} VP「よう」／「はず」]



5. まとめと今後の課題

本稿では、次の点を論じた。(i) 英語の条件節には、ムードを表す副詞が生じない事実が、Rizzi (2004)の素性によって定義される相対最小性から導かれる。(ii)日本語の条件節には、ある種のムード要素が生じる事実が、井上(2006, 2007)の論じる真性モーダルと疑似モーダルの特性を考慮することにより、相対最小性から導かれる。(iii)CP 領域に井上(2008)の提案する ModalP があり、ムード表現の移動のターゲットになる。(iv) 制限的關係節には、Rel という機能範疇が存在し、先行詞が the であるか a であるかにより、RelP の主要部には[+specific] か[-specific]という2種類の素性が追加される。(v) 非制限的關係節については、SapP という機能範疇があり、その主要部が指定部と補部に対して、挿入のイントネーションで音声化する指令を出す。(vi) Sap という機能範疇の主要部は、指定部と補部に話し手と聞き手の意味解釈を付与する指令を出す。

Appendix

Krapova and Cinque(2005)によれば、TP の下の一連のモーダルの階層は、CP 領域にも生じる可能性がある。井上の提案する ModalP も、IP 内の ModalP と同じタイプのものかもしれない。しかし、ModalP の CP 内における正確な統語位置はまだ同定されておらず、さらに研究が必要である。

さらに、本稿では、井上が詳細に論じる真性モーダルの持つ機能範疇という特性と疑似モーダルの持つ語彙範疇の区別が、日本語の条件節におけるムード副詞の分布を説明する際に、重要であることを見た。Haegeman (2006)によって、イタリア語でも、同じような区別が必要であることが示されている。例えば、イタリア語の *sembrare* (seem)は、疑似モーダルのような語彙的(lexical)な用法と真性モーダルのような機能的(functional)の用法があることが、clitic climbing の振る舞いの差により説明されている。例えば、語彙的な *sembrare* は、語彙範疇なので、*sembrare* と共起する動詞とは、異なる複文の構造を持つ。clitic climbing は、通例、単文内にのみ見られる現象なので、*sembrare* の補文に生じる clitic を、*sembrare* の左に移動することが不可能となる。一方、機能範疇の *sembrare* は機能範疇なので、それと共に生じる動詞と共に、単文の構造を持つ。そのため、*sembrare* の補文に生じる clitic を、*sembrare* の左に移動することが可能となる。以上の点は、次のようにまとめることが出来る。⁵

- (1) a. 語彙的＝複文構造
- b. 機能範疇＝単文構造

本稿の主張によれば、日本語に関して次の予測がなされる。つまり、日本語でも、真性モーダルを含む文は、単文の構造

を持つため、それと共に生じる動詞の要素は、単文に課される制約(*clause mate condition*)の性質を示すはずである。一方、疑似モジュールを含む文は、複文構造の構造を持つので、補文内の要素が主文内の要素に依存することは不可能となるはずである。日本語には、イタリア語の *clitic climbing* に対応する構文を持たないので、この点の検証は、現在のところ不可能で、さらに研究が必要である。

さらに、本稿の視点は、Tateishi (1994)と Vermuelen (2004)の論じる「で／が」の格交替現象に関して、一石を投じる。まず、「で／が」の交替とは、次に見る現象で、副詞節「〜で」が、「〜が」に変換可能である、という現象である。「が」が用いられた場合、副詞節をフォーカスや強調の意味解釈をもたらすという特徴がある。(この点に関しては、Endo (2007)を参照。)

- (2) a. この店で、学生がよく本を買う。
b. (他の店ではなく)この店が、学生がよく本を買う。

Tateishi (1994)は、この構文に見る「この店が」構文の「が」を、格助詞としている。一方、Vermeulen (2004)は「この店で／が」構文の「が」は、フォーカスマーカーと主張する。

本稿で論じた「ば」条件文における分布を見ると、Tateishiの説の方が正しいことが示唆される。まず、よく知られているように、格助詞の「が」は、それを認可する動詞がテンスの形式を持つことが必要となる(cf. Takezawa (1987))。

- (3) a. 太郎が走った。
b. *太郎が走り方。

⁵ Haegeman は、語彙的な *sembrare* は、*clitic climbing* が不可能で、機能的な *sembrare* は、*clitic climbing* が可能であることを示している。

非定形の(3b)においては、動詞「走」に、テンスのない形式(=「り」)が用いられており、「が」格が生じると非文法的となっている。

さて、本論で議論した「ば」条件文は、次に見るように、動詞がテンスの形態素を持たない形式を要求する。

- (4) a. 雨が降れば...
- b. *雨が降るば...

以上の点を念頭に置いて、この「ば」条件文においては、「で／が」の交替が不可能である点に着目しよう。

- (5) a. この店で学生がよく本を買えば...
- b. *この店が学生がよく本を買えば...

Tateishi の主張するように、この「で／が」の格交替において生じる「が」が格助詞であるならば、(5)に見るコントラストは、自然に説明可能となる。なぜなら、「ば」条件文には、「が」を認可するテンス要素が動詞に生じることはないので、(5b)に見る非文法性は自然に説明される。

一方、Vermeulen が主張するように、「で／が」の格交替において生じる「が」が格助詞ではなく、単なるフォーカスマーカーであるならば、(5)に見るコントラストは、自然に説明をすることは難しい。なぜなら、フォーカスマーカーとされる「さえ」等の取り立ての助詞には、次に見るように、テンスは必ずしも必要でないからである。

- (6) 雨さえ降れば...

最後に、ムード要素が生じない条件文以外の構文として、日本語の勧誘表現をみよう。日本語の勧誘表現は、次に見るように、「よう」という形態素が動詞に生じる構文である。(cf. 井上 2007、上田 2007)

(7) さあ出かけよう

この勧誘文には、ムード要素が生じることが不可能である。

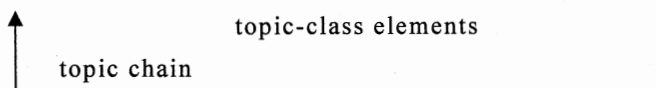
(8) *正直に言えば／幸運なことに／申し立てによれば／おそらく出かけよう。

この事実は、本稿の視点から、次のように説明可能となる。
まず、勧誘表現は、文のタイプを表す。Rizzi (1997)によれば、文のタイプは、ForceP という CP 内で一番高い位置に機能範疇により指定される。この考えを採用して、次に見るように、IP 内から ForceP へゼロ演算子が生じると考えよう。さらに、ここに生じる移動により形成されるのは、topic type の連鎖であると考えよう。

(9) ...[ForceP [IP...
 /----topic chain-----/

すると、次に見るように、間に topic と同じタイプのムード要素が生じると、素性により定義される Rizzi (2004)の相対最小性により非文法性が導かれる。

(10) [ForceP 正直に言えば／幸運なことに／申し立てによれば／おそらく [IP...



以上の説明は、Force への移動が topic タイプの連鎖を形成するという仮定に大きく依存している。さらに、勧誘表現において移動するゼロ演算子がどの位置から移動するかも不明である。これら 2 点は今後の研究課題となる。

参考文献

- Chiba, Shuji. 2003. Licensing conditions for sentence adverbials in English and Japanese. In *Empirical and theoretical investigations into language*, S. Chiba et al. (eds.), 95-109. Tokyo: Kaitakusha.
- Cinque, Guglielmo. 1999. *Adverbs and functional heads: A cross-linguistic perspective*. Oxford: Oxford University Press.
- Endo, Yoshio (遠藤喜雄). 2006. *A Study of the cartography of Japanese syntactic structures*. Ph.D. dissertation, University of Geneva.
- Endo, Yoshio (遠藤喜雄). 2007. *Locality and information structure: A cartographic approach to Japanese*. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins Publishing Company.
- 遠藤喜雄. 2009. 「話し手と聞き手のカートグラフィー」. 『言語研究』(日本言語学会) vol. 136. pp.93-120.
- Geis, Michael. 1970. *Adverbial subordinate clauses in English*. Ph.D. dissertation. Cambridge: MIT.
- Hegeman, Liliane. 2006. Clitic Climbing and the Dual Status of *sembrare*, *Linguistic Inquiry* 37, 484-501.
- Hegeman, Liliane. 2008. The movement derivation of conditionals. MS. University of Ghent.
- Haegeman, Liliane. 2010. 神田外語大学における口頭発表.
- 井上和子. 2006. 「日本語の条件節と主文のモダリティー」
Scientific Approach to Language 5: 9-28. 神田外語大学言語科学センター.
- 井上和子. 2007. 「日本語のモーダルの特性再考」長谷川信子編
『日本語の主文現象』 pp.227-260. 東京: ひつじ書房.
- 井上和子. 2008. 「CP 領域の果たす役割」井上ゼミでの発表.
神田外語大学.
- Lyons, John. 1977. *Semantics*. Cambridge: Cambridge University

Press,

Larson, Richard 1990 Extraction and multiple selection in PP. *The Linguistic Review* 7: 169-182.

眞鍋雅子. 2008. 「Xナラの意味と構造」神田外語大学言語科学センター 理論言語学・日本語学ワークショップにおける口頭発表。

南不二男. 1974. 『現代日本語の構造』東京：大修館書店。

Palmer, Frank. 1986. *Mood and Modality*. Cambridge: Cambridge University Press.

Rizzi, Luigi. 2004. Locality and left periphery. In *Structures and beyond*, A. Belletti (ed), 104-131. Oxford: Oxford University Press.

Shlonsky, Ur. 2009. Null subject and topicalization. *Studia Linguistica* 63(1), pp. 1-25.

Takezawa, Koichi. 1987. *A Configurational Approach to Case Marking in Japanese*. Ph.D. dissertation, University of Washington.

Tateishi, Koichi. 1994. *The syntax of subjects*. Tokyo: Kurosio.

上田由紀子. 2007. 「日本語のモダリティーの統語構造と人称制限」. 長谷川信子編 『日本語の主文現象』 pp.227-260. 東京：ひつじ書房。

Vermeulen, Reiko. 2005. Possessive and adjunct multiple nominative constructions in Japanese. *Lingua* 115, 1329-1363.

261-0014

千葉県千葉市美浜区若葉 1-4-1

神田外語大学

言語科学研究科

endo-y@kanda.kuis.ac.jp